

I. 導入

おはようございます。生きていれば、人生の荒波にもまれることがあります。そんなときイエスは、嵐に立ち向かう勇気を私たちに与えてくださいます。私たちの遭遇する嵐が、実際の悪天候であろうと、比喩的な嵐であろうと、ともにおられるイエスのご臨在とみことばの約束が平安をもたらします。パウロは福音宣教を進める中で、言われのない告発や不当な投獄、暗殺計画といった人生の嵐に見舞われました。今日の聖書箇所では、パウロは台風のような激しい嵐に遭います。

先週の聖書箇所は次の言葉で終わりました。使徒26: 32 「アグリッパ王はフェストゥスに、『あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに』と言った。」アグリッパ王と総督フェストゥスは、パウロが無実であるとわかっていました。しかし、パウロが皇帝に上訴したため、ローマに送られなければならなくなりました。準備が整い、ついに出発の日が来ました。この旅路で、パウロは好意的な扱いを受けました。おそらく、パウロがローマ市民権の所有者であり、有罪判決を受けていなかったからでしょう。実際には、この旅の一行は別の理由でパウロに感謝すべきところです。パウロがここにおいて祈ってくれたおかげで、一行は嵐で命を落とさずに済んだからです。



では、使徒27:1-15を読みましょう。読みながら、「わたしたち」と書いてある部分に注目しましょう。これは、ルカがパウロとともに旅していることを指しています。アリストアルコも一緒でした。アリストアルコは、使徒19:29にパウロの旅の同行者として初めて登場します。友人を同行させる許可が得られたのは、パウロがこの旅で受けた最初の親切です。

II. 聖書朗読 (使徒27:1-15, 新共同訳)

27:1 わたしたちがイタリアへ向かって船出することに決まったとき、パウロと他の数名の囚人は、皇帝直属部隊の百人隊長ユリウスという者に引き渡された。 27:2 わたしたちは、アジア州沿岸の各地に寄港することになっている、アドラミティオン港の船に乗って出港した。テサロニケ出身のマケドニア人アリストアルコも一緒であった。 27:3 翌日シドンに着いたが、ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行ってもてなしを受けることを許してくれた。 27:4 そこから船出したが、向かい風のためキプロス島の陰を航行し、 27:5 キリキア州とパンフィリア州の沖を過ぎて、リキア州のミラに着いた。

27:6 ここで百人隊長は、イタリアに行くアレクサンドリアの船を見つけて、わたしたちをそれに乗り込ませた。 27:7 幾日もの間、船足ははかどらず、ようやくクニドス港に近づいた。ところが、風に行く手を阻まれたので、サルモネ岬を回ってクレタ島の陰を航行し、 27:8 ようやく島の岸に沿って進み、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる所に着

いた。27:9 かなりの時がたって、既に断食日も過ぎていたので、航海はもう危険であった。それで、パウロは人々に忠告した。27:10 「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります。」

27:11 しかし、百人隊長は、パウロの言ったことよりも、船長や船主の方を信用した。27:12 この港は冬を越すのに適していなかった。それで、大多数の者の意見により、ここから船出し、できるならばクレタ島で南西と北西に面しているフェニクス港に行き、そこで冬を過ごすことになった。27:13 ときに、南風が静かに吹いて来たので、人々は望みどおりに事が運ぶと考えて錨を上げ、クレタ島の岸に沿って進んだ。27:14 しかし、間もなく「エウラキロン」と呼ばれる暴風が、島の方から吹き降ろして来た。27:15 船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができなかつたので、わたしたちは流されるにまかせた。

III. 教え

この地図は、パウロの旅の行程を示しています。一行はカイサリア付近の港から、沿岸を北上する船に乗りました。船はシドンに立ち寄りました。ここでパウロは岸に上がり、友人たちと会ってもてなしを受けることを許されました。そこからは向かい風に阻まれながら、ゆっくりとミラに向かいました。ミラに着くと、百人隊長が見つけた大型船に乗り換えました。この船は、エジプトのアレクサンドリアからイタリアに行く穀物運搬船でした。後にルカは、この船に276名が乗っていたと書いていることから、この船が大型船だったことがわかります。



ここからクニドスを目指して西へと航行しましたが、風のせいで進めず、クレタ島の南側を回ろうと南下しました。「良い港」と呼ばれる所まで着いた時、パウロは次のように警告しました。使徒27:9-10 「27:9 かなりの時がたって、既に断食日も過ぎていたので、航海はもう危険であった。それで、パウロは人々に忠告した。27:10 『皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります。』」

ここで断食日と書かれているのは、ヨム・キプール、つまり贖罪の日のための断食を指しています。これが紀元59年なら、10月5日のことです。冬が近づくにつれ、地中海での航行は危険を増します。パウロの職業は船乗りではありませんでしたが、旅の経験は豊富でした。コリント第二11:25にあるとおり、3度も難破に遭遇したことがありました。つまり、身をもって警告した内容を経験済みだったわけです。この警告は預言となり、まもなくそのとおりになろうとしていました。それでもなお、百人隊長や船長は前に進もうとしました。

使徒27:12 「この港は冬を越すのに適していなかった。それで、大多数の者の意見により、ここから船出し、できるならばクレタ島で南西と北西に面しているフェニクス港に行き、そこで

冬を過ごすことになった。」大多数の者は、船への負担が少ない港に行きたいと望みました。フェニクスは比較的大きな町で、船員たちにとっても快適に冬を越せるということだったのでしょう。この決断から、多数決が常に正しいわけではないことを考えさせられます。後に彼らは、パウロの警告に従っておけばよかったと後悔することになりました。

使徒27:13-14 「27:13 ときに、南風が静かに吹いて来たので、人々は望みどおりに事が運ぶと考えて錨を上げ、クレタ島の岸に沿って進んだ。27:14 しかし、間もなく『エウラキロン』と呼ばれる暴風が、島の方から吹き降ろして来た。」愚かな決断が時として賢明に映ることもありません。一行は、西から吹き付ける向かい風に逆らって、困難な航行を何日も続けてきました。ここに来て、南風が静かに吹き、まさに順風に見えました。一行はすぐさま出航しましたが、順風の状態は長くは続きませんでした。「エウラキロン」に巻き込まれたのです。これは、東ヨーロッパから地中海に向けて冷たく激しい風を吹かせる冬の嵐です。

1978年、私は海兵隊の一員として空母ミッドウェイで任務を果たしていました。あるとき、接近したふたつの台風の間を空母が通りました。波が船首を越え、飛行甲板が水浸しになったのを見て、私は唖然としました。通常、海面から甲板は約20メートルもあるからです。最新の装備が備わった大型船に乗っていても、大きな嵐に見舞われるのは恐ろしいものです。パウロの一行が乗っていたのは、もちろん現代のような船ではありませんでした。



当時の船は、晴天の航行のみに適していました。このような船が大嵐に耐える可能性は低いと言えます。パウロが乗っていた船は、台風のように風が吹き荒れる嵐に巻き込まれました。このような嵐の中で、船を操縦することはできません。彼らはただ、波風に流されるに任せるほかありませんでした。さてどうなるか、使徒27:16-26を読みましょう。



IV. 聖書朗読(使徒27:16-26, 新共同訳)

27:16 やがて、カウダという小島の陰に来たので、やっとのことで小舟をしっかりと引き寄せることができた。27:17 小舟を船に引き上げてから、船体には綱を巻きつけ、シルティスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて海錨を降ろし、流されるにまかせた。27:18 しかし、ひどい暴風に悩まされたので、翌日には人々は積み荷を海に捨て始め、27:19 三日目には自分たちの手で船具を投げ捨ててしまった。27:20 幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた。

27:21 人々は長い間、食事をとっていなかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。27:22 しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。27:23 わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、27:24 こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。』

神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』 27:25 ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。 27:26 わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずですよ。」

V. 教え

歴史家によると、ローマの町で消費される穀物は主にエジプトや北アフリカから輸入されていたそうです。この需要に応えるため、図のような穀物運搬船が地中海を毎日航行し、何万トンという穀物を輸送しました。パウロが嵐に遭ったとき、このような船に乗っていたわけです。このとき、事態は絶望的で、船員たちは船が沈まないようにと必死でした。



先ほどの個所にあった小舟とは救命ボートのことです。これは通常、船の後方につなげてありました。この小舟を船に引き上げたのは、小舟が船にぶつかって、船が損傷するのを避けるためです。また、船体に綱を巻きつけ、補強しました。船を軽くしようとほとんどの積荷を海に投げ捨て、船具まで捨てました。つまり、できる限りのことをしたのです。それでも、船が沈没するのではないかとこの恐れが常につきまといました。

使徒27:20 「 幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた。」太陽や星は方向を知る唯一の手段でした。それが見えない日が続けば、自分たちがどこにいるかまったく見当はつかなかったでしょう。夜は漆黒の闇に包まれ、昼でも薄暗い状態です。嵐に巻き込まれて数日間、彼らはすべての望みを失おうとしていました。



皆さんもこのような経験をしたことがあるでしょうか。おそらく、船に乗っていて大嵐に見舞われたという経験はないでしょう。けれども、人生のどん底を味わったという人は多いのではないのでしょうか。人生の荒波にはいろいろあります。地震や津波、洪水、火山の噴火といった自然災害、飢餓、伝染病があります。個人の生活でも、職や家庭を失うこともあれば、離婚もあるでしょう。ガンや心臓疾患、感染症などの病気、事故、ケガもあります。孤独やうつ状態に陥ることもあります。家族や友人との不和や絶縁、迫害があるかもしれませんし、大切な人を亡くすこともあります。今まさに、そのような状況に置かれている人も私たちの身近にいます。

どんな悩みや苦しみに遭遇しても、神は私たちをお忘れにならないという確信をもつことができます。詩篇46篇の著者はこう記しました。(詩篇46:2-4)「46:2 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。 46:3 わたしたちは決して恐れない／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも 46:4 海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも。」神のなさる御業が常に私たちの目に見えるわけではありませんが、主がともにいてくださることは確かです。必ずそこにいまして助けてくださるお方なので、神はあなたのことを忘れてはおられません。

神は、パウロたち一行のことも忘れておられませんでした。彼らは数日間食べ物もなく、船酔いに苦しめられていたでしょう。そんな中、希望の言葉が与えられました。パウロが立ち上がって話し始めました。まず、自分の警告を聞き入れるべきだったと言いました。そう言わずにはいられなかったのでしょうか。次に、パウロは希望の言葉を続けました。

使徒27:22 「しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。」船は激しい嵐の犠牲になってしまいます。しかし、来週の聖書箇所では、最後まで船に乗っていた人全員が助かります。この箇所から、イエスが十字架にかかってくださったことを思われます。それは、イエスを信じるすべての人が救われるためです。イエスの十字架上の死を思うと悲しくなりますが、その死のおかげで、私たちは命を受けます。それは、このお方を信じてこのお方にとどまることによって可能になります。

使徒27:23-24 「27:23 わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、27:24 こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならぬ。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』」パウロは誰のもので誰に仕えているのでしょうか。パウロはこう言いました。「わたしが仕え、礼拝している神」 私たちも神のものであり、神に仕えているなら、神は必要なときに助けてくださいます。この箇所から、パウロまでが怖がり始めたことが分かります。そこで、神は天使を遣わされました。私たちが思う以上に、神は天使を頻りに遣わしてくださっていると思います。私たちがそれにあまり気づかないだけです。というのも、天使は自分の素性を明かすことなく、必要なことだけをやるからです。天使が最初にパウロに言ったのは、パウロが皇帝のもとに行くと言われたのだから恐れる必要はない、というものでした。

その後、天使はこう付け加えました。「神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。」神は、船に乗っている人全員の命を救うと約束してくださいました。パウロは全員の無事をずっと祈っていたでしょうが、ただ単に命の安全だけを祈っていたとは考えにくいと思います。きっとパウロは、一緒にいた人たちの永遠の救いを祈っていたに違いありません。こう考えると、天使の言葉にはさらなる重みがかかります。この解釈が正しいとは言いきれませんが、私自身の考えでは、その船に乗っていた人全員は今、天国にいると思います。これはそれほど極端な見解ではありません。パウロは数週間にわたって、言葉と行いの両方でこの人たちにイエスの愛を伝えたのですから。

この箇所から、私たちが希望を得ることができます。私たちの身近な人、大切な人のための祈りや証を、神は見過ごされません。身近な人のために忠実に祈り、言葉でも行動でもイエスの愛をもって接するなら、恵み深い神がその人たちを私たちに任せてくださるかもしれないという素晴らしい望みを持つことができます。ちょうど、船に乗っていた人たちをパウロにお任せになったのと同じです。

使徒27:25 「ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。」困難で八方ふさがりに見える状況でこそ、あきらめ

ない勇気が必要です。パウロにはそのような勇気がありました。そして、一緒に船に乗っていた人々に、元気を出そうと促しました。皆さん、これは私たちに与えられた選択肢です。苦境に立たされたとき、私たちは元気や勇気を出すという選択をすることができるのです。ただし、根拠のない勇気は愚かさにもなり得ます。勇気を持つだけのしっかりとした根拠が必要です。神への信仰と神の約束への信頼がその根拠となります。これについて、パウロは次のように言い、良い手本を示してくれました。「わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。」

VI. 結び

来週まで、パウロには海で漂ってもらうことにしましょう。今日学んだのは、パウロが嵐の中でも主を信頼し、勇気を出すという選択をしたことです。私たちにもそうするようにと、パウロは勧めます。どんな問題があっても、自分は負け組だと悲観しながら生きる必要はありません。パウロのように、嵐の中でも勇気を出すことを選択できます。周囲の人にもそうしようと励ますことができます。どんな嵐の中にも、神と神のみことばを信じ、勇気を出しましょう。

最後に、ローマ8:35-39にある励ましの言葉を読んで終わらしましょう。「8:35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。8:36 「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。8:37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、8:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」アーメンでしょうか。アーメンですね。

祈りましょう。

VII. 祈り

注：今日のメッセージと関連する聖書箇所が、週報に印刷されています。この一週間、毎日ひとつずつの聖句を思い巡らしてください。これらのみことばが、嵐の中でも勇気を出せるようにきっと助けてくれるでしょう。

日曜日: ヨハネ第一4:18,月曜日: 申命記31:6,火曜日: イザヤ書26:3,水曜日: ヨハネ14:27,木曜日: イザヤ書41:10,金曜日: 詩篇56:4,土曜日: ローマ8:15.